日本語教育と国語科教育との融合における情報教育の果たすべき役割

日本英語教育学会・日本教育言語学会第47回年次研究集会

2017年3月4日　上松 恵理子

©Eriko Uematsu

自己紹介

上松恵理子

ICT教育研究家。世界各国のICT教育の調査研究、日本のネット利用やSNS等のICTに関する調査研究及び、モバイルコミュニケーションや情報の新リテラシーについての研究を行っています。

©Erika Umematsu

中学校・高校に勤務し、
国語科教育の授業実践とその研究取り組む
日本語教師養成講座非常勤講師
放送大学の科目履修生としてメディア論を履修した際、
メディアリテラシー教育の研究が海外では
ネイティブランゲージ（国語）またはアート科で行われていることを知る

社会人入学で大学院へ、大学院から博士課程へ
博士（教育学）取得、大学の教員になる
現在は情報教育を中心に国語科教育と日本語教育の融合を模索しながら海外の最先端の教育調査を行っている

現在、武蔵野学院大学准教授
東洋大学、実践女子大学等の
非常勤講師
早稲田大学情報教育研究所招聘講師・研究員、
国際大学GLOCOM客員研究員等

研究内容
新リテラシー
テクノロジーを使った教育方法
世界のICT教育調査研究

教えている授業の内容
・情報リテラシー
・国語表現法
・モバイルコミュニケーション
・実践リテラシー
・デジタルコンテンツ演習
・コンピュタリテラシー

講演概要

- ライフヒストリーからの分析
- 海外の現状からの分析
- 日本語教育からみた国語教育
- 情報教育の役割

©Eriko Uematsu

ライフヒストリーからの分析

©Eriko Uematsu

これまでの研究の流れ

・大学卒業後、国語科の教員として授業を行う
（高等学校・中学校）
・海外の文学理論・メディア教育・海外のカリキュラム研究
・日本語教師養成講座の教員として日本語教師養成に関わる

学校にパソコンやデジタルメディアが普及

・日本語教育の実践

・ICT教育の調査を行う
・大学の情報教育、日本語表現法の授業を担当

©Eriko Uematsu

大学卒業後、公立高校みた国語科

国語の免許は教授法の具体的な理論や情報の単位がなくてもなることができる（いきなり授業への戸惑い）
研究授業で多くの授業実践の見学をする
　『故郷（魯迅）』は120以上の授業例を分析
教材について
・社会や理科などの知識が必要な教材もある
・教材は文章のみ（PISAでは非連続テキストも）
・携帯電話は不可

授業方法
・絶対に予習させない。
・研究授業にもかかわらず先生が音読する授業
・1時間、ずっと漢字のプリント学習
(覚えている漢字、覚えていない漢字関係なし)
・せっかくグループワークさせても答えは一つ
　（なんのための相談？）

©Eriko Uematsu

すぐに時代はデジタル社会になるだろう

そこでリテラシーの研究を始める

©Eriko Uematsu

リテラシーの氾濫

メディア・リテラシー
情報リテラシー
インフォーメーションリテラシー
マルチメディア・リテラシー
コンピュータ・リテラシー
インターネット・リテラシー
ライブラリー・リテラシー
ＯＡリテラシー
金融リテラシー
空間リテラシー
情報リテラシー
ビジネスリテラシー
メディアリテラシー

インターネットリテラシー
マルチメディアリテラシー
スポーツリテラシー
コミュニケーションリテラシー
計算機リテラシー
サイエンスリテラシー
福祉リテラシー
福祉情報リテラシー
エコリテラシー
数字リテラシー
人工言語リテラシー
地図リテラシー
図形リテラシー
情報処理リテラシー
ネットワークリテラシー
テクノロジーリテラシー
言語情報リテラシー

マネジメントリテラシー
情報通信リテラシー
日米情報リテラシー
異文化理解リテラシー
ヴィジュアルリテラシー
映像リテラシー
情報活用リテラシー
環境リテラシー
ディジタルリテラシー
リーガルリテラシー
ＰＣリテラシー
社会情報リテラシー
情報基礎リテラシー
ヒューマンリテラシー

リテラシーの前に、点のあるものと無いものがある。

©Eriko Uematsu

リテラシーとは

文字の読み書き能力・識字力

その文字の記録媒体が変化

新たなリテラシーを考えていく必要がある。

現代社会において、
文字の読み書き能力や識字力では不十分

©Eriko Uematsu

リテラシー批判

概念の多さへの批判が主

・これを教育に取り組むことの批判はない

リテラシーの概念が広義なのに、「リテラシーをつけよう」ということが様々なところで言われている。

©Eriko Uematsu

リテラシーの本質

- 読み書きに象徴されるコミュニケーション能力

・ 読み書きの識字力・読解力・解釈力・表現力

しかし、単なるスキルではない。

日本人がスキルという言葉を使わず、リテラシーと言うことに、
リテラシーの多義的意味が含まれている→このような広義リテラシーを
国語科教育に生かすには、リテラシーの概念を再考する必要性がある

※文字を読む識字能力だけではないリテラシーの例

例：活字は読むことができても、読書をしない場合がある。
あるいは、読書をしても、その意味や内容を理解することができない場合がある。

課題：国語科教育が新たなリテラシーに対応しているのかどうか。
本発表では、読むことにおけるさまざまなリテラシーを考察していく

©Eriko Uematsu

１　文字を読むことからのリテラシー

文字とは意識を微分する最小の単位

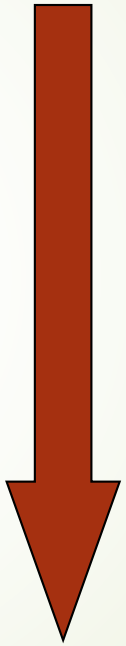
文学の拡張＝文字＜単語＜頁＜書物

価値（意味）とは差異である＝ソシュール

©Eriko Uematsu

抽象の度合い

現実世界
三次元（空間）
二次元（平面）
絵文字
象形文字
表語文字
音節文字
表音文字



抽象度が高い

©Eriko Uematsu

記号論の姿

記号過程→意味の生成

「記号」「対象」「解釈項」の三項関係＝パース←ダイナミックな過程

セミオーシス（記号過程）　→セミオ・リテラシー

「メディア＝物質＋記号」　→メディア・リテラシー

- 記号論にとって、「メッセージ」とは、記号が実現したもの（非言語コミュニケーションも含む）

石田英敬『記号の知/メディアの知』２００３

言葉の意味とコンテクスト

言葉の多義性が従来多く論じられてきた

辞書的意味 ⇄ 文脈的意味

意味の「情報」そのものが関心の対象

話し手の意味 ⇄ 聞き手の意味

池上嘉彦『語彙と意味』岩波書店　1977

言葉の意味とコンテクスト

日常の言語での「意味」は抽象的レベル＝指示対象との間には
ずれ

話し手と聞き手の食い違いは両者の

- コードの差
- 言葉に対する知識の差
- その事柄に対する態度の差

言語の使用者にとっては、
語の意味は仲介的役割を果たすだけのもの

関心は伝達されるべき情報にある（非言語的も含まれる）

池上嘉彦『語彙と意味』1977岩波書店

読むことは
テクストとのコミュニケーション

テクスト分析の対象の４つの分層化

・コンテクスト（context）
・意味（meaning)
・語結合(wording)
・表現(expression)

表現層以外の層は　・観念構成（ideational)
・対人(interpersonal)
・テクスト形成(textual)

メタ機能
（metafunction)

コンテクストの分類

- 文化のコンテクスト（context of culture)
- 状況のコンテクスト(context of situation)

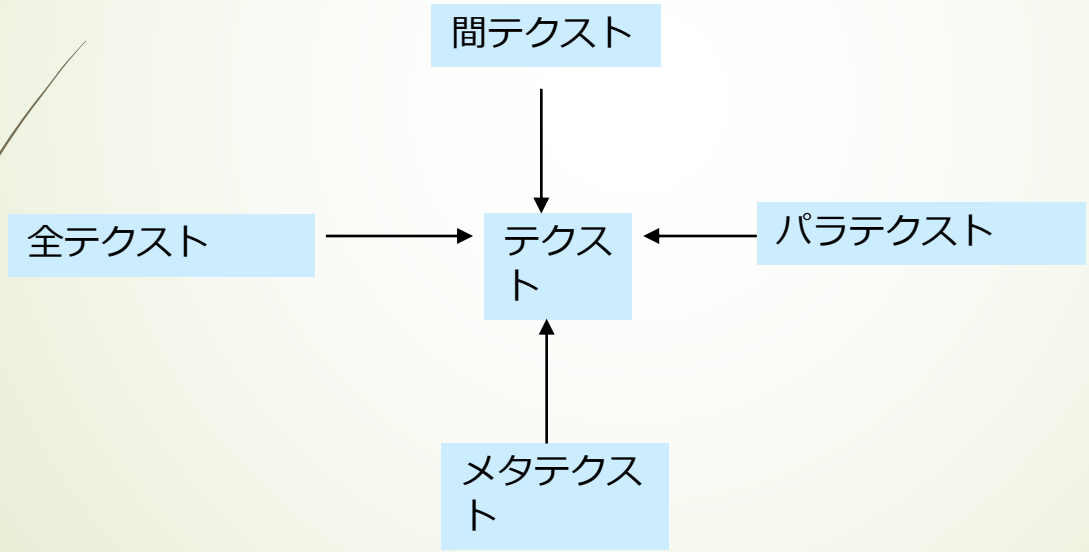
SFL=hallidy選択体系機能言語学

David butt ,Haliday,yusuke.takahashi『Realization of text generation Depending on Context』2005

TEXT

聖書→解釈学へと発展
作家論と読者論による力学

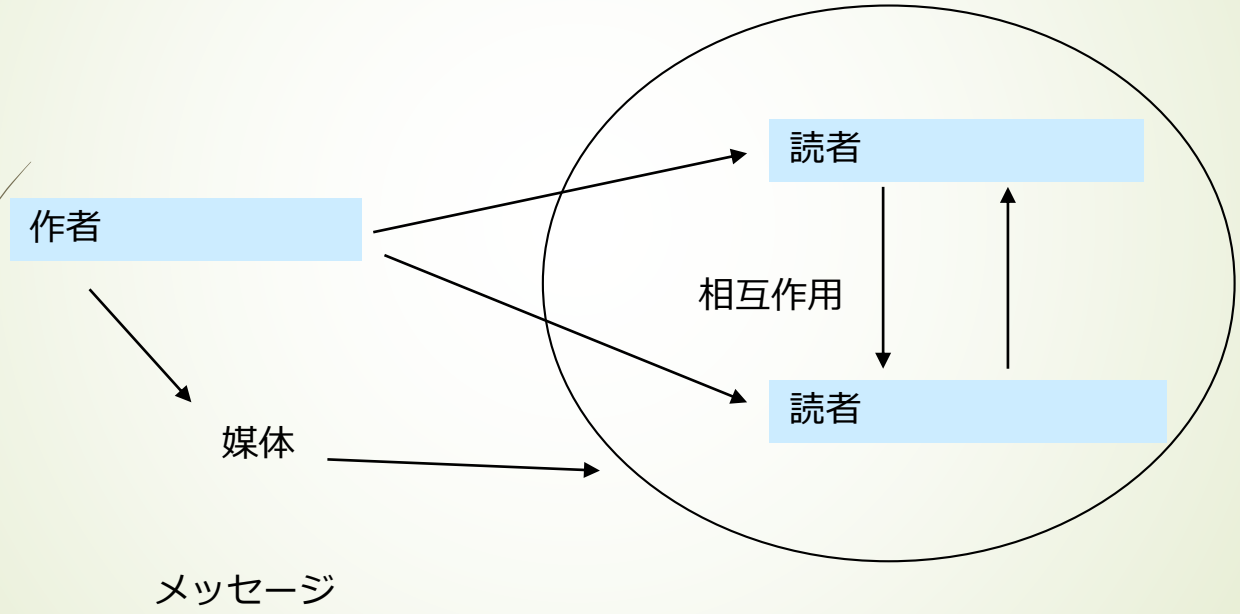
広義のテクスト



松澤和宏『文学テクストの生成研究の課題と射程』2002

読むことの作用

コミュニケーションとしての読み



西郷などの内の目、外の目に類似している

©Eriko Uematsu

テクストの価値を理解するリテラシー

- 単なる文字のリテラシーだけでは不十分
  - ・様々な社会的コンテクストを理解するリテラシー
  - ・批判的なパラダイムである新たなリテラシーの重要性
    （疑問の持ち方、分析の仕方、問題の解き方等）
- さまざまなイデオロギー文学作品にも反映される
- 「オーディエンスによるテクスト解釈は、一般的に言って、支配的な文化価値観や信念と協調関係にある」（メディア・リテラシーのヘゲモニー・モデル説）
- 個人のアイデンティティを確立するためには、複合的なイデオロギー概念の表象を読み解くリテラシーが必要となる。

国語科教育においても生徒に、文字の読み書き能力だけでなく、日常的な問題について個人として批判的思考をさせることが有効ではないだろうか

クリティカルシンキング（単なる批判的な考えではない）

©Eriko Yamasu

読むことの変遷

書くことと読むことを分けること

- 読むことは潜在的な作者になることの行為
- 書くことは潜在的は読者に向けての行為

読むことは

個人の言語活動を「文字」の属する言説秩序の規則性と、

書かれた文字による意識のインテグレーション活動に合わせて使用する

高度で文化的な習得を必要とする活動（石田2006）

石田英敬『知のデジタルシフトー誰が知を支配するのか？』2006弘文堂

読むこと

音読か
黙読か
個室で読むか、誰と読むか
文庫本で読むか、教科書教材として読むか

読者をとりまく文化
イデオロギー
読者の社会階層

読むことにおいては、これらのことも複合的に.多元的に関わる

©Eriko Uematsu

David Buckingham

四つの基本概念

1 制作(Production)：制作過程，放送者・スポンサー，メディア・マーケティング等

2 言語(Language)：編集，視聴覚的表現様式，ジャンル，コード，きまり

3 表象(Representation)：リアリズム，ステレオタイプ化，登場人物の構成，家族像

4 オーディエンス (Audiences)：ターゲット・オーディアンスとその反応，視聴率，批評

David Buckingham, 2003 p.65, p.76

（１）どのメディアに由来するか

- トロッコ（芥川龍之介）の事例

①文字だけによる読解（文字のみのプリントの配布）
②挿絵のついている教科書教材による読解
③音読のみの読解という３つのパターン

挿絵の影響が読みに現れているのではないだろうか
教科書に掲載されているイメージ

©Eriko Uematsu

（２）自分の経験と重ね合わせ再考すること

自分史分析　　メディアリテラシーの方法

作品内容に対する個人の反応→多様な読み方の誘導

- 同一視分析

主人公と自分を重ねあわせる

・性格の類似性

・憧れ

・対立する視点の同一視（例えば土工など）

- 情動的反応分析

作品が自分にどんな影響を及ぼすかの追究

アートシルバーブラッド『メディアリテラシーの方法』リベルタ出版2001

（３）作品の中のコンテクスト

- 芥川の他の作品と「トロッコ」の読み比べ（芥川の作品の特性）
- 作者である芥川龍之介と良平との人像の重なりを
- 当時の階級制度（土工の社会的立場・良平の立場）＝登場人物それぞれの立場の違い
- 時代的状況から作品を解釈し、捉えなおす
- 作品の描かれた時代と今の時代との差異

©Eriko Uematsu

（４）何が表象されているのか

- 言葉から探っていく方法

心情描写と情景描写

表象されている表現から、良平の揺れ動く心情をとらえ、情景描写によって主題を把握していくプロセスを経ることが作品の解釈には重要となってくる。

それぞれのイメージの差異を理解し、それぞれのイメージの違いの多さに学習者が触れること

©Eriko Uematsu

リテラシーを考察するにあたって

国語教育だけではなく、
横断的にみていく必要がある

- 例えば

記号論
テクスト論
メディア論
コミュニケーション論

©Eriko Uematsu

『故郷（魯迅）』の授業分析

『故郷』授業実践分析表　　主題人手四編教育手法充実員科　第2日目第8次授業ー(員科NO1)　　2005/10/20

実践者	実践年	実践名	掲載誌	授業のねらい	授業の評価	視点
板垣昭一	1969	文学作品を正しく読みとらせることを求めて	明治図書/教育科学国語教育	文学作品とは作家が生活現実（現象）の中にある意味を見出しそれを虚構プロットで再構成したものであるので、言語で科象化されたものである。科象を通して対覚するこのような視点から分析・主題追求をする。	、	(2)
伊藤裕	1970	「故郷」（魯迅）による実践報告	日本文学	学習者が自分で読み自分で考えることを基本としたならい。自分の感想をありのまま学級の中に出すことによって自分の間違いに気付き、さらに社会区切され深い読みを思索に入っていくこと。	感想から出発し、感想に戻る。（読み→感想→感想をもとに話し合い→全文を読み直して整理→まとめの感想）	(3)
久保和也	1970	中学校の文学教材研究ー魯迅「故郷」を具体例に	明治図書/教育科学国語教育	読み手（学習者）の心を大切にする。読み手の心象投影を内言とする。具体的には、登場人物の行動に批判・同上・反発を持ったり、登場人物の心情の推移や形析を通して疑問をもつこと。	学習者の疑問点の追求が授業の核となるように、内言を記録し、学習者が読むとき、どのようなことを考えながら読みを進めていくか、考えの所在等をつかむ。内言の記録、内言の結果がどのような科で、意見や感想になる、ひとりひとりの問題意識の中身を明らかにする。	(2)(3)
青柳隆	1970	「故郷」（魯迅）を例に	明治図書/教育科学国語教育	学習者の主体性を尊重し、徒の手も借りずに文学作品に対し主体的に読む。自分的な範読で理解を早める。味読（語句の意味・文章の内容・情景・心情等を味わいながら読み）後、朗読することで教育的な学習をさせる。	第一次感想を書き、相互の感想を教育的に生かす。第一次感想を発表後学習者自作問題解決のための資料を作りをし、最後に主題をとらえる。冒頭の段落を範読・朗読。	(3)
秋吉真枝子	1972	創造性を育てるための読解指導ー「故郷」魯迅作内好訳（中神新国語三）をとりあげて	『国語の研究』大分大学国語国文学会	創造性・創造性・思考力をを読解の指導過程の中で培うために問題意識を持たせて主体的に読み取らせる。	学習者から出た疑問を精選しプリントにして授業で活用させる。疑問意識を学習者に持たせ、第四思考を通して読みを深めさせ、第2次感想文を書かせる。	(3)
前野明人	1972	中学校における「段落」指導	明治図書/教育科学国語教育	場面ごとに内容をまとめ、段落相互の科象相関をとらえるところから主題を導く。いくつかの段落に区切ることによって主題を読み取る。作品の主題が色濃く出ている段落をマークさせる。科象相関のネットワークをとらえる。	(2)
早川長三郎	1974	主題単元の目標と読書資料との関連を重視して	明治図書/教育科学国語教育	「文学と人生」の中心となる「人間としていかに生きるべきか。」をとらえる。	教師主導型で、生徒に主体性を持たせるきっかけは教師がすべきものとする。	(5)
松田千賀子	1975	読みを深める学習・指導過程の試み ー「故郷」の授業から ー	佐賀大国文	主題をとらえることを主眼とする。疑問点・調べたこと・感想などと書きとめることによって、個々の読みが確認され、深められる。	第一次感想・学習課題を発表し、グループで主題をとらえる。当時の中国の歴史や社会を調べる。魯迅の経歴を調べる。グループごとの発表会をする。	(1)(3)
村田耕一郎	1977	中学校における指導法の改善	明治図書/教育科学国語教育	言語技能を主体的に受け止め能動的、自主的な学習を進めるるよう配慮する。確かな読解力から主体的な読みへと発展させる。	第1次感想文を書き、それをもとに学習課題を決める。	(3)
小林方研一	1977	新層的読み	明治図書/教育科学国語教育	中心に据る重要なことは、全体に関わっていく言葉をつかみとる力を養う。それが全体に関わっていくことをつかめるようになる。	主題にせまることは・ことがらを押さえて進める。生徒側からの発想、発表によって授業を容易なものとする。	(2)(3)
佐々木伸郎	1978	理解活動を主にした関連指導	明治図書/教育科学国語教育	主題・要旨をある程度共通的にとらえる。人生や社会についてとらえる。	主題をとらえた後、人生や社会について感じたこと、考えたことを発表する。発表のためのメモをとる。	(5)

田村正巳	1991	「人物の形象」と「心情・考え方の変化」を	明治図書/教育科学国語教育	形象の正確で豊かな読み取りとそれに基づいた作品の本質「主題・理想」を理解する力を育てる。人間らしい生き方について考える。	人物形象（わたし、楊おばさん、閏土、老栄水生の形象）を洞察する。わたしの形象から心情・考え方の変化を読み取り、社会の現状を認識させる。	(2)(4)
渡山久志	1991	教材の構造と必要性に応じた展開を	明治図書/教育科学国語教育	学習者の生活経験にないものや、あっても異文化のコンテクストの影響でことなったイメージに変容されるような場合は説明を必要とする。イメージを補充し創りかえることで形象の再創造をさせる。	「ぼんやりとした私の目」について考え、その後、魯迅の伝記的な資料を参考にするよう指示し、説明を加える。その後、「ぼんやりとした私の目」の形象を読ませる。	(1)(2)
鳥越輝昭	1992	現場の国語研究 よりよい学習課題づくり―『故郷』（中二）―	表現国語研究	学習者の作った学習課題に答えさせる。登場人物の視点で気持ちの変化をとらえさせる。	課題を解決し主題をとらえる。「わたし」の視点、閏土の視点で気持ちの変化をとらえさせる。	(2)(4)
清水達一	1995	生徒が主体となる授業の構築を求めて－形成的評価を取り入れた『故郷』の授業実践	旭川国文大2号	生徒の学習の進展に関し、教師と生徒がフィードバックすることにより、生徒を生かすあるいは生徒が主体となる学習に結びついていく	まず、生徒の中国に対する生徒の意識がどんなものであるかを診断テストする。その後、魯迅の経歴と辛亥革命について説明し、グループに分かれて話し合い学習をする。	
滝井徳子	1987	故郷・生き生きと読み合える主体を育てる	明治図書/教育科学国語教育	文学を生き生きと読み合える主体を育てる。	個性的で多様な読みから出発する。語句を丁寧に読み込んでイメージ化する。追体験の楽しさを追究し、それをもとに話合う。	(2)(3)
四戸千賀子	1990	「故郷」をどう読ませるか－言語を生かした－試み	月刊国語教育	学習者の疑問点から私の心の推移を軸に主題に迫る。	全文を通読し、第一次感想をまとめさせる。発表、学習課題と方法を確かめさせる。作中人物の性格、心情を読み取る。	(3)(4)
小林敏子	1992	魯迅「故郷」の教材分析	月刊国語教育	時代的背景をおさえ、作者の意図をおさえる。（学習者が心情の変化や場面に関心が集中し教情的な読みにならないよう主題に導くためである。）主人公の心情を時代との関わりを考えながら読ませる。	『故郷』を一読後、疑問に思ったこと、印象に残った人物と理由を聞く。学習者に場面から全体を視野に入れて作品の主題を考えさせる。	(1)(3)
伊藤博	1994	<実践報告>生徒の学習意欲を高める授業の工夫－魯迅「故郷」から	早稲田大学国語教育研究	登場人物の人間関係を通して、人間観を確かなものにする。私という人物に対する批判的な視点で読む。「希望」の表現が、実はそれほどたやすいものではないことも考えさせる。	学習者が読み疑問に思ったことを場面ごとの疑問としてまとめ、クラス全体として考える。授業形態はグループ学習による。点ごとの発表。	授業形態(3)研究内容(4)最終的なねらい
佐藤きむ	1995	楽しい読書教室10楊おばさんと『故郷』	実践国語研究	作者の意図が登場人物を通してどう表現されているかという語彙の学習に関連させ、読ませる。また楊おばさんを通して当時の『故郷』の歴史的背景をとらえる。	主人公のわたしや閏土になって手紙を書く。『故郷』を映画化したらどのようになるか、登場人物の視点に立ち考える。また「てん足」などから当時の中国の風俗習慣を考えさせる。	(1)(4)
中田美恵子	1998	読む楽しさと書くよろこびを－「故郷」（魯迅）の実践	月刊国語教育	説明がなければわからない事柄がいくつあり、どのような生活かを理解し閏土の心を知る。	4コマ漫画に書かせあらすじをつかみ、作品の転換点をとらえる。「希望」という語句に着目し、形象の中心である人物像を状況描写からとらえる。	(1)(2)
姥子友正	2000	登場人物の人物像から世界を読み解く－方略『故郷』の実践から	国語国語16号	作品世界がどのように作られているかという構成上の点や細かいところにあってみえにくかった作者の意図やねらいをさぐらせること。	まず、登場人物の確認から入って行き、人物像に迫る。登場人物像の把握交流プリントを作成。	(4)

New Literacyの必要性

- パーソナル・コンピュータ、ケータイ、電子書籍、iPad等の登場で、生徒を取り巻く読書環境が急速に変化している。このような中で、多くのテキストに触れながら、主体的に読むことが重要となってきた。
- 教科書教材となっている文学作品をいつでもどこでもダウンロードして読むことが可能となった。
- そこで国語科の実践を変化させた

©Eriko Uematsu

教科書はメディア

『こころ』というメディア

新聞で出版され、ラジオで放送（朗読），
市川崑監督，新藤兼人監督により映画化.
各局でテレビドラマ化.
コミック文庫やビックコミックで漫画化.
現在，インターネットからダウンロードし，
ＰＣやケータイ等で読むことが可能

教科書は，学習者が教室という限定された空間で，
選択権が無いツールとして存在する.

©Eriko Uematsu

『こころ』の非連続テキスト

- 地図
- 家の間取り図
- 写真
- 原典の本
- 作者自筆の扉絵
- 『こころ』の自筆原稿
- 夏目漱石の写真（定番の教材の最後にある顔写真と、執筆した当時のスナップ）

・本郷界隈の写真

©Eriko Uematsu

研究の方法

方法：教科書教材をメディアとしてとらえる

目的：メディア・リテラシーを高める

教材：教科書国語科教科書において
定番と言われている『こころ』
（夏目漱石）

高校国語教科書のうち10社全て、21種類の教科書に採録されている

©Eriko Uematsu

『こころ』の最初のメディア

- 草稿
- 1914年４月～８月まで『朝日新聞』に掲載.

漱石は朝日新聞に入社し，新聞というメディアの特性を十分に理解

新聞社が営利を目的とする企業であることからすれば必然的なこととして、新聞メディアの特性に合わせて著されていることは明らか

©Eriko Uematsu

教科書教材としての『こころ』のメディア特性

- 全文が掲載されるのではなく，殆どの教科書が「Ｋの自殺」の前後だけに限定された形で出版

- 『こころ』を部分的に学習するという形

  <パッケージ化>

教科書での作品の取り上げられ方が、カット編集されていることと、挿絵や地図が載っていること

©Eriko Uematsu

各教科書毎にばらばらな掲載方法

- 「上」「中」「下」と要旨をまとめ(明治書院)
- 『こころ』の作品についての説明と本文までのあらすじ（第一学習社）
- 『こころ』の紹介文（４，５行）と「上」「中」「下」の要旨（三省堂）さらに本文のあと、最後の省略部分の要旨
- 本文までのあらすじとその後のあらすじ(教育出版・大修館書店）
- 本文までのあらすじ（筑摩書房）

©Eriko Uematsu

共通しているところ
教科書教材には主題があらすじに記載

(本文に記載されていない)

原典においては，Ｋの自殺がもとで，「先生」が最後には自殺をする結末となるが，　その際，「先生」は妻に「明治の精神に殉死するつもりだ」と述べている。

その言葉には主題として大きな意義があるにもかかわらず，

「明治の精神」の部分の記載がない。

©Eriko Uematsu

漱石が描きたかった本郷界隈

- 漱石は山の手そのものを書き続け，また漱石の周りには「高等遊民」か，それに似た生活をしている人物も多い（石原）
- 階層に生きる人々を「高等遊民」と称した(前田）
- 「先生」は，職業に就かなくても生活していける利子生活をしている「高等遊民」(小森，1999：217)
- 明治末年，本郷界隈には，西洋間がある家等がある
- 新しい山の手の生活スタイルに生きる女性(主婦）が存在

本文とのギャップが生じてしまっている

©Eriko Uematsu

メディアとしての都市
本郷界隈

- テクストとして都市空間を読むことは都市論（佐藤，1998）であり，テクストの中の都市空間を読む方法がメディア・リテラシー
- 登場人物の生活空間を理解する
- 漱石が作品の射程としたテクストの新空間は，どのように理解されていたのかを見る方法

必ず登場する本稿界隈の図と間取り

©Eriko Uematsu

メディア・リテラシーの多様な概念

- 活動という概念としては、「市民がメディアを社会的文脈でクリティカルに分析し、評価し、メディアにアクセスし、多様な形態でコミュニケーションを作り出す、また、そのような力の獲得をめざす取り組み」

イギリス・カナダから日本に来たものである。

日本のメディア・リテラシー論には、社会学的な立場からの系譜

方法・能力という概念

- 方法という概念としては、主体的に、あるいは、能動的に学ぶという授業実践の方法などがある。
- 能力という概念としては、総務省がメディア・リテラシーの構成要素を、「メディアを主体的に読み解く能力」「メディアにアクセスし、活用する能力」「メディアを通じコミュニケーション創造する能力」の３点としている 。

©Eriko Uematsu

定番教材国語教科書のクリティカルシンキング

広い意味での道徳教育的な（石原）部分を有する

『こころ』

エゴイズムはいけませんよ、というメッセージ

『羅生門』

強盗をしようかどうかのエゴイズム

『山月記』

エゴイズム

見えないイデオロギー教育

批判的思考(クリティカルシンキング）が育たない

©Eriko Uematsu

教科書教材をメディアリテラシーの観点からとらえると

作品のメディア特性比較，教科書の比較などは，作品をメタ的に見ることが可能

教科書のメディア特性を把握が可能

作品を解釈するためには有効な手立て

今後は、学習者・教師・教科書の作成者とが協同で作成に関わることが必要（ギャップの解消？）

メディア・リテラシーの観点から，教材にアクセスする必要性

©Eriko Uematsu

国語科教育

- あらゆるメディアからの文章が教材となり得る

(学習方法はコミュニケーションをとるようなアクティブラーニングが前提)

- 実社会でのコミュニケーション能力の育成を中心に据える。（転移を自覚的に位置づける）
- 学習者の得た知識をどう再構造化させるか。
- 方法論や技術、用語を取り立てて扱う。

(メタ認知も含めた自覚化、どのテキストにも応用可能な読みの方法論を扱う)

©Eriko Uematsu

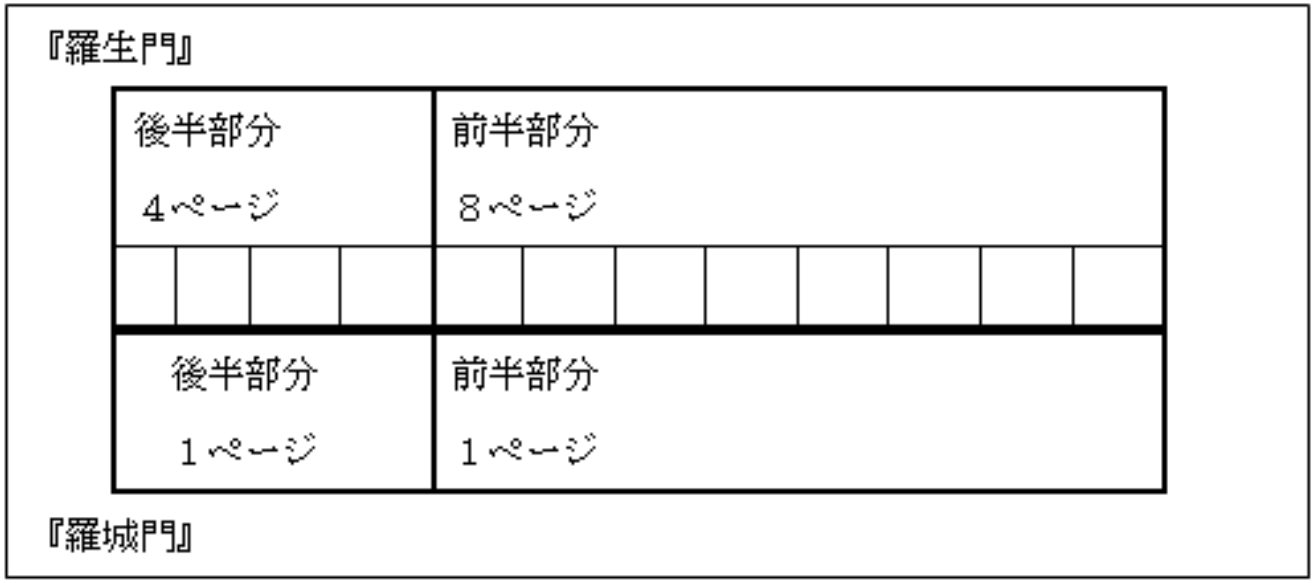
プレ研究

『羅生門』（芥川龍之介）と『羅城門』（今昔物語集）をメディアとして捉える授業

「国語総合」と「古典講読」の教材の読解比較

©Eriko Uematsu

２つの作品の構成の違い



板書

©Eriko Uematsu

ワークシート２

ワークシート２			
	『羅城門』（今昔物語集）	『羅生門』（芥川龍之介）	違っている点と感想
盗人（下人）の言葉			
盗人（下人）の行動			
盗人の気持ち			
媼（老婆）の行動			
媼（老婆）の気持ち			

©Eriko Uematsu

ワークシート１

『羅生門』（今昔物語集） 原文P69	『羅生門』（今昔物語集） 訳	『羅生門』（芥川龍之介）
盗人、これを見るに、心も得ねば、	盗人はこれを見ると、理解できなかったので、	下人には、もちろん、なぜ老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。 したがって、合理的には、それを善悪のいずれにかたづけてよいか知らなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この『羅生門』の上で、死人の髪の毛を抜くということが、それだけで既に許すべからざる悪であった。もちろん、下人は、さっきまで、自分が、盗人になる気でいたことなぞは、とうに忘れているのである。
これは、もし鬼にやあらむと思ひて、恐ろしけれども、もし死人にてもぞある、奇して試みむと思ひて、やはら戸を開けて、刀を抜きて、	これは、もしかして、鬼であろうか、と思って、恐ろしかったが、もしや死霊であるかもしれない。奇して試してみようと思って、そっと戸をあけて、刀を抜いて、	そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、はしごから上へ飛び上がった。そうして盗賊の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩み寄った。老婆が驚いたのはいうまでもない。 老婆は、一目下人を見ると、まるで弩にでもはじかれたように、飛び上がった。
「おのれは、おのれは。」と言ひて走り寄りければ、	「こいつめ、こいつめ。」といって走り寄ったところ、	「おのれ、どこへ行く。」 下人は、老婆が死骸につまずきながら、慌てふためいて逃げようとする行く手をふさいで、こう言った。
嫗、手荒ひをして、手を振りて走ら[illegible]	老婆はうろたえて、手をすりまわせて慌てて騒いだの[illegible]	老婆は、それでも下人を突きのけてゆこうとする。下人はまた、これを行かすまいとして、[illegible]

『鼻』

- 生徒の感想
- ＜教科書＞
- 教科書が一番読みやすい。（32.1%の生徒）
- 教科書の文字が慣れていて好ましい。
- 教科書には漢字に振り仮名が振ってある。
- 教科書には脚注があって、分かりやすい。
- ＜草稿＞
- 草稿は昔の漢字を使っていて読みにくい。
- 草稿は漢字が難しい。
- 同じ文章なのに、草稿は表現が難しく感じた。
- 印刷のムラ、紙の質感が読みにくい。
- 昔の漢字を覚えることができて、面白い。
- 漢字が難しいので情報を得るのに混乱した。
- 草稿の方が1､2分読むのに時間がかかった。
- 漢字は難しいが内容は変わらないので大丈夫だった。むしろ草稿の方が良い。
- 草稿でも読むのに支障が無かった。
- 草稿は読むのに苦労したが、読んでいくうちに分かってきて、達成感のようなものがあった。

全体の感想

- 　色々なメディアで読むことで、内容がより分かりやすくなった。
- 電子書籍で読んでみたい。
- 文章が同じなのだから、文字が新しいか古いかの違いしかない。
- 昔の人は、このような文字が読みやすかったのだろうか。
- 普段は読むことができない草稿を読むことができてよかった。違いを比べることができたので有意義な活動だった。
- 昔の文字は読み方が違ったので混乱した。最初はどう読めばいいか分からなかった。
- 別の作品でも、このように様々なメディアから読みたい。
- このような活動は内容が理解しやすい。
- 限定された場所の比較があったが、全体を比較するのと変わってくると思う。
- 本は長持ちしていい。（メディアのような更新型のテキストに対して）
- 草稿でも情報の取り出しは難しくなかった。
- 内容が変わりなく、漢字が微妙に違うだけであった。そのため、読む回数が増えて良かった。

©Eriko Uematsu

読むことの影響（ｺﾝﾃﾝﾂ)

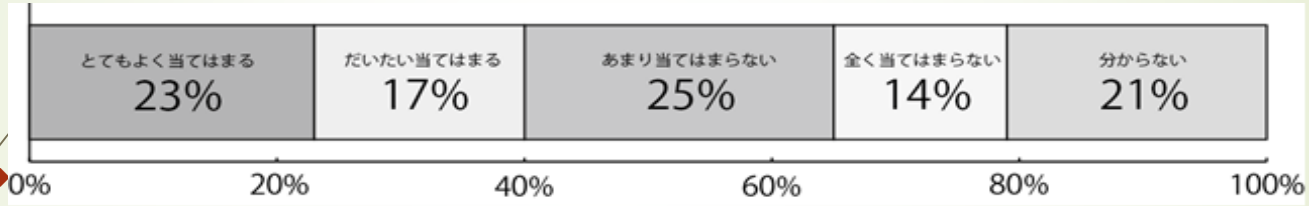
- 読むことの現状の変化
- デジタル教科書
- PISAの読解力の変化（ER）
- スキルの変化（２１世紀型スキル→評価も）
- 教材研究の変化
- 授業の変化（学校の変化）
- デジタル・メディアによる教科の枠の変化
  （ERの授業）
- 図書館の変化

この他にも色々な影響が急速に起こってくることが予測されている

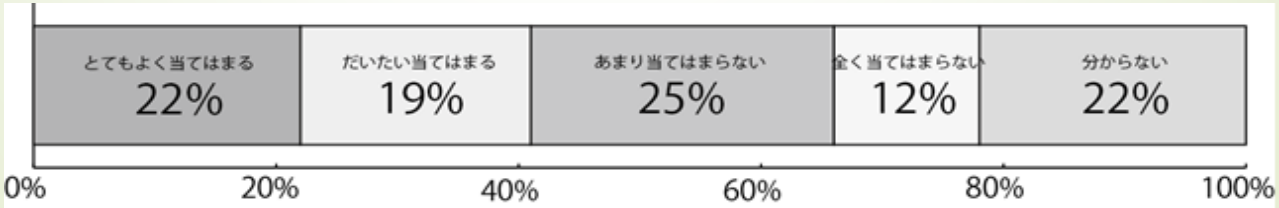
©Eriko Uematsu

書くより打つ？調査（上松２０１０）

- 短い文を書く時は紙に書くよりは、携帯に文字を打ち込む方を使う？



- 込む方を使う？



©Eriko Uematsu

PISA　新しいバージョンの読解力

電子テキストの読解力を組み入れた

読みの取り組みとメタ認知の構造について詳述

２１世紀における読解力のいかなる定義も
印刷テキストとデジタルテキストの両方を含む

読解力は社会の文化と変化とともに
進化していると定義＝基礎的スキルとしての読解

©Eriko Uematsu

PISA

「書かれたテキスト」とは、「図・画像・地図・表・グラフ」とある。また、「理解し、利用し、熟考する」とは「評価するために、読者はテキストの内容について考え、それまでの知識や理解を活用したり、テキストの構造や形式を考える」とある。

メディアの読み解き能力

©Eriko Uematsu

グローバル・スタンダード

- PISAが求める読解力（Reading Literacy）の定義がある。PISAの定義は、「読解力とは、自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力である

メディアの読み解き能力

©Eriko Uematsu

デジタル・テキスト教育の必要性

- インタラクティブ（源氏物語・ケータイ小説の例）
- 更新型のテキスト特性（紙媒体とは明らかに異なる点）
- ハイパーリンク（主体的にどんどん検索できる）
- 双方向で即興的になされる情報の発信手段

表現技法

・横書き・文字制限のあるスタイル・文が短い

・展開が速い・文字色・フォント

・一定のスクロールでちょうど読める行間

言語・映像・音声のリテラシーを総括し

教育の中で発達の度合いに応じた体系化が必要

（上松2009）

ハイパーテキストリンク（PISAの読解力）

- ハイパーリンクまたはハイパーテキストリンク

別の情報（通常はページ）に論理的に結びつけられた一つの情報のことを言う。

一つの情報とは、単語・フレーズ・図・アイコンのことを言う

©Eriko Uematsu

ハイパーテキストの読解

ハイパーテキストの読解、ナビゲーション、情報検索に熟練するためには

読み手は独立型・埋め込み型のハイパーリンク、非連続なページ構造、内容を体系的に表示したツールに精通していなくてはならない

21世紀型スキル

- 批判的思考力と問題解決能力
- コミュニケーションとコラボレーションの能力
- 自立的に学習する力
- ICTを確実に扱うことのできる能力・スキル
- グローバルな認識と社会市民としての意識
- 金融・経済に対する教養
- 数学、科学、工学、言語や芸術といった分野への理解を深めること
- 創造性

清水（2011）

２１世紀型スキル
４カテゴリ定義

「ＡＴＣ２１Ｓプロジェクト」で検討

・思考の方法（創造性と革新性、批判的思考・問題解決・意思決定、学習能力・メタ認知）
・仕事の方法（コミュニケーション、コラボレーション（チームワーク））
・学習ツール（情報リテラシー、情報コミュニケーション技術（ＩＣＴ）リテラシー）
・社会生活（市民権（地域および地球規模）、生活と職業、個人的責任および社会的責任（文化的差異の認識および受容能力を含む））

清水　2011

©Eriko Uematsu

ERA：Electronic Reading Assessment

コンピュータ使用型問題（ERA：Electronic Reading Assessment）が開発された。
（コンピュータに電子テキストの形で提示される課題に回答する）

コンピュータに電子テキストの形で提示される課題に解答するもの
（従来の問題冊子（ブックレット）に鉛筆で回答する筆記方問題に加え）

©Eriko Uematsu

読むことと書くことの変化

＜読むこと＞
メディア・リテラシーがついた。HPを見比べ、根拠をもとに主体的に読み取ろうとしていた。
教師が用意したものを主体的にリンクし、写真と比較することができた。具体的には主体的に見て、両方を比べながら主張することができた。
＜書くこと＞
書くことにおいては、２つの資料をもとに比較しながら書くことができた。生徒達が自分の意見をそれぞれ下記、意見を言いながら直す場面もあり、共に学び合うということで書く力が高まった。

©Eriko Uematsu

デジタル・メディアによる図書館の変化

例：図書館司書
情報検索の支援
適切な情報源へのアクセスの支援
文書作成やス表作成
レポート作成に必要なソフトウェア操作等の技術的な支援
その両方を同時に提供できること

山内（2011）

海外での授業

ネイティブランゲージを中心に

©Eriko Uematsu

時代に合わせて教育の枠組みを変化させる

- フィンランドのプロジェクトベースドラーニング
- オーストラリアの合科と新設教科
- 教科だけでなく授業時間もフレキシブル
- 2時間続きで行う方が学習効率が良い

(コマ切れでやると前の時間の復習から入り効率が悪くなるため)

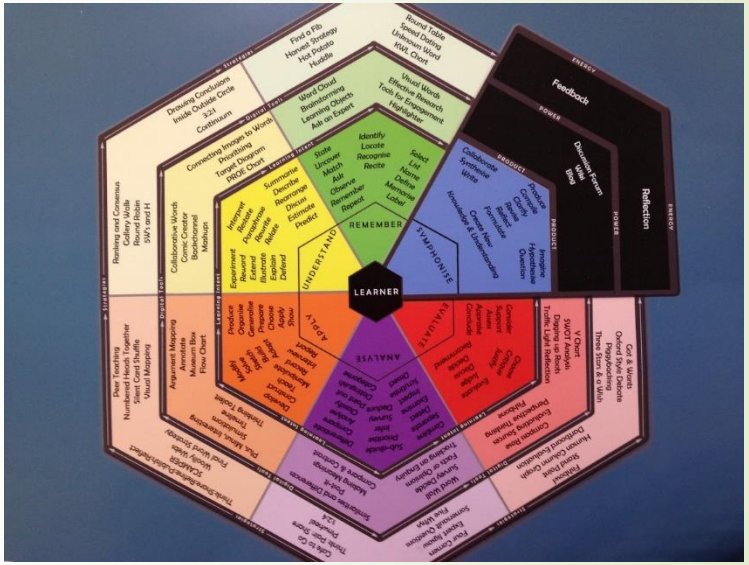
- テクノロジーの進化に伴う社会変化に学校を合わせる

©Eriko Uematsu

オーストラリアの情報教育

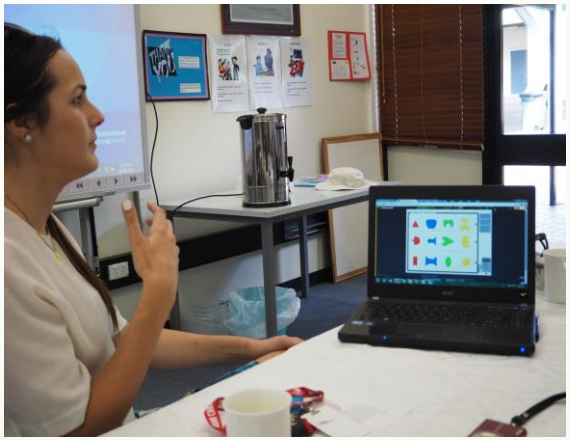
クィーンズランド州（QLD)では・・・

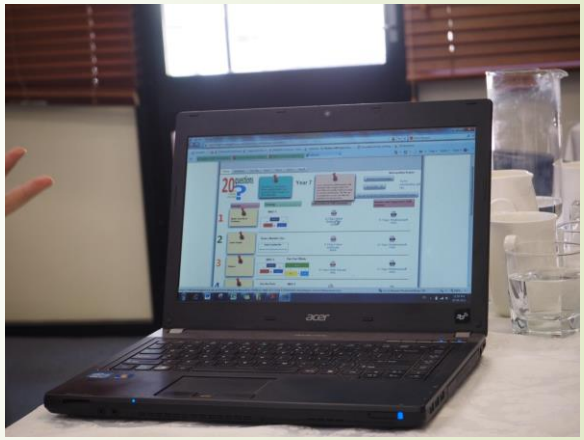
ICT教育においても教育学の理論は外さない。
John Hattieの教育方法。
ブルームの理論を使ったシンフォニーモデル。


LEARNER
REMEMBER
UNDERSTAND
APPLY
ANALYSE
EVALUATE
SYMPHONISE
Feedback
Reflection
Discussion Forum
Wiki
Blog
Drawing Conclusions
Inside Outside Circle
5-2-1
Continuum
Find a Fib
Horses Strategy
Hot Potato
Huddle
Round Table
Speed Dating
Unknown Word
KWL Chart
Ranking and Consensus
Gallery Walk
Round Robin
Six Word 41
Connecting Images to Words
Prioritising
Target Diagram
DRAW Chart
Word Cloud
Brainstorming
Leaning Objects
Ask an Expert
Visual Words
Effective Research
Tools for Engagement
Highlighter
Collaborative Writing
Knowledge & Understanding
Create New
Formulate
Hypothesise
Question
Imagine
Collaborative Symbolic
Collaborative Words
Comic Creator
Bookchannel
Mathuin
Argument Mapping
Annotate
Museum Box
Flow Charts
Dear Teaching
Numbered Heads Together
Silent Card Shuffle
Visual Mapping
Cast & Words
Oxford Style Debate
Three Stars & a Wish
Three Stars & a Wish
Diagram on Room
Traffic Light Reflection
V Chart
Pro & Con
Consider
Assess
Appraise
Conclude
Decision Making
Generating
Evaluate
Hypothesise
Plan
Design
Create
Compose
Generalise
Produce
Organise
Generalise
Predict
Apply
Show
Experiment
Research
Extend
Illustrate
Interpret
Demonstrate
Classify
Compare
Contrast
Sub-divide
Organise
Deconstruct
Attribute
Outline
Structure
Integrate
Deduce
Infer
Dissemble
Critique
Assemble
Reorganise
Synthesise
Hypothesise
Design
Plan
Construct
Produce
Transform
Integrate
Combine
Compose
Generalise

オーストラリアの情報教育

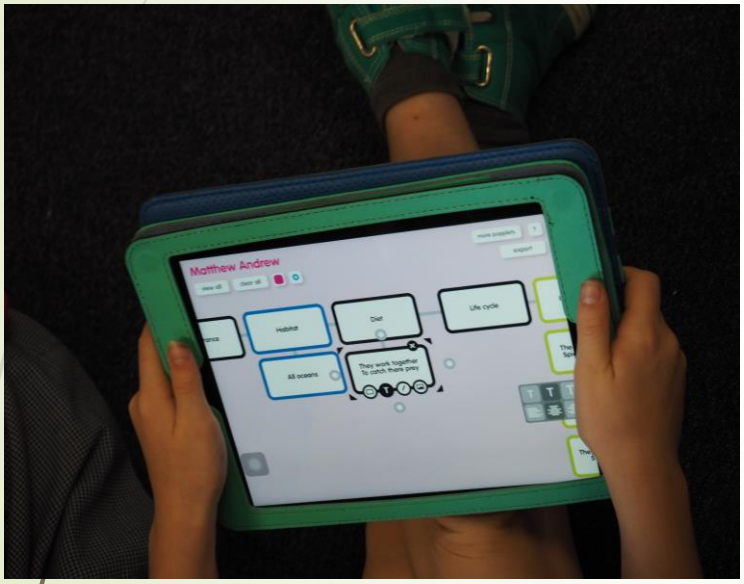
Tahlia先生がはネイティブランゲージの授業の課題提出において、
生徒の宿題を管理するダッシュボード dorpboxを日常的に使っている。
ディスカッションボードもあり、保護者は子どものアカウントで見ることができる。

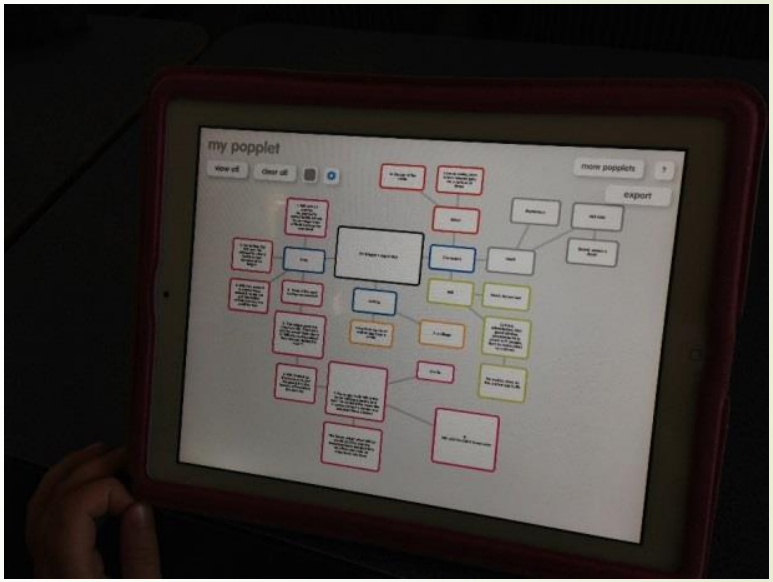




オーストラリアの情報教育

２年生、popletを使ったマインドマップ的なロジカルシンキングのレッスン





オーストラリアの情報教育

- 教室に置かれたパソコンブースで調べ学習
- 教室のサブスペースに５台程度デスクトップパソコンがあり生徒はいつでも利用できる
- 電子黒板はプロジェクター式＋タッチパネル
- 教室空間を越えた活動が可能

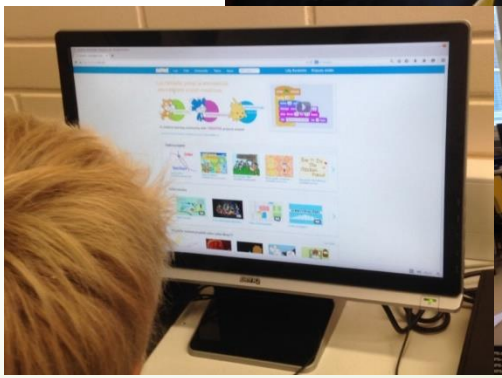
教室に置かれたパソコンブースで調べ学習

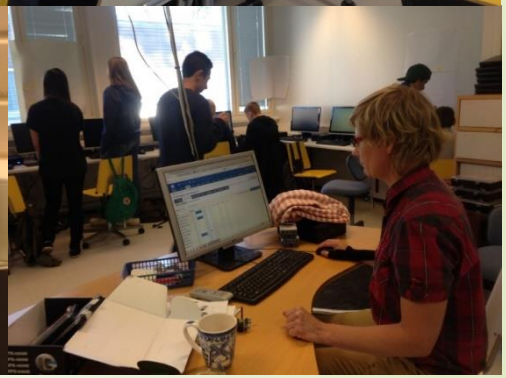
テーマに従って検索結果をクリッピング

電子黒板に検索結果を表示して議論する

フィンランドの情報教育

- パソコンに座るのは最後。
- 最初はディスカッション
- 国語の時間で行うマインドマップも使用





海外の低年齢からのICT教育

Prep（０年生）

オーストラリアでは小学校に上がる１年前からが義務教育。

これは北欧も同じ（北欧は０年生という）

メールの受送信は小学校２年生から必須

クイーンズランドのカリキュラムと学校教育

・Prepからデジタルメディアを使うことが必須

- タブレットで知育ソフトを活用
- 保護者とのやりとりはFacebook
- Emailはニュースレター
- 保護者には３つのアドレス（両親、家）を登録
- スマートスクールのアプリで保護者に対するニュースをアップデートしている

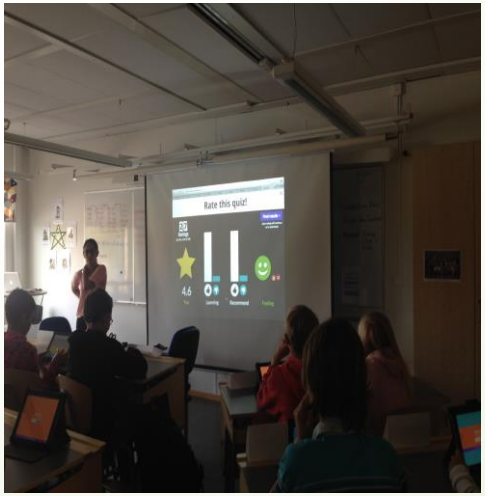
海外の低年齢からのICT教育

Prepクラス

- 内容や学習者のレベルのグルーピング
- アクティブ・ラーニング
- 動画や静止画を組み合わせて学習

タリン　（エストニア）の情報教育

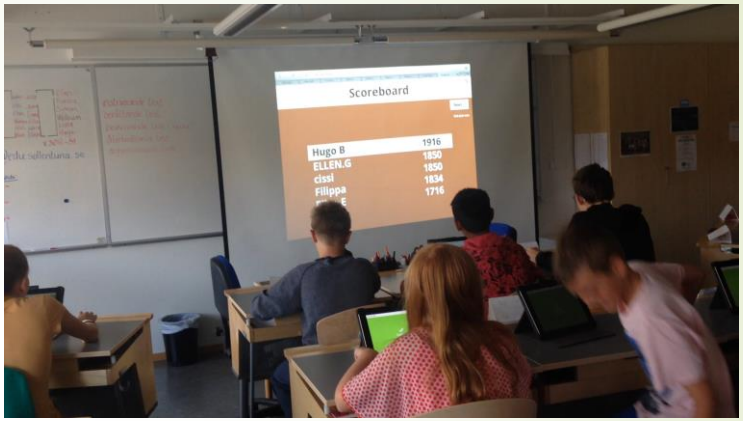
小学校１年生からプログラミング教育が必修。
スマートフォン所有率は高い(訪問した学校は５０%～８０%
ゲーミフィケーションが流行ではなく根付く。

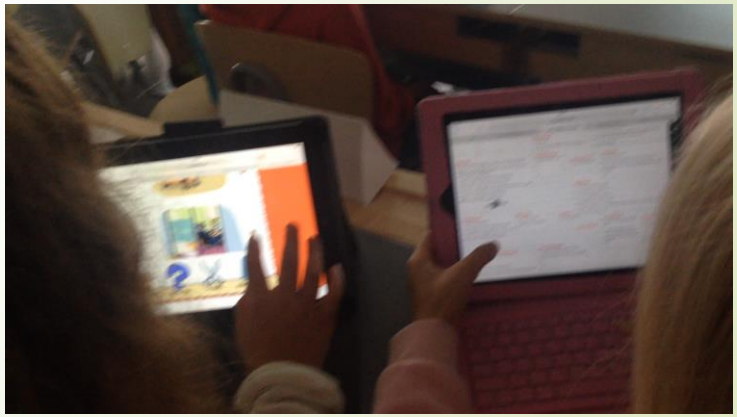


タリン　（エストニア）の情報教育

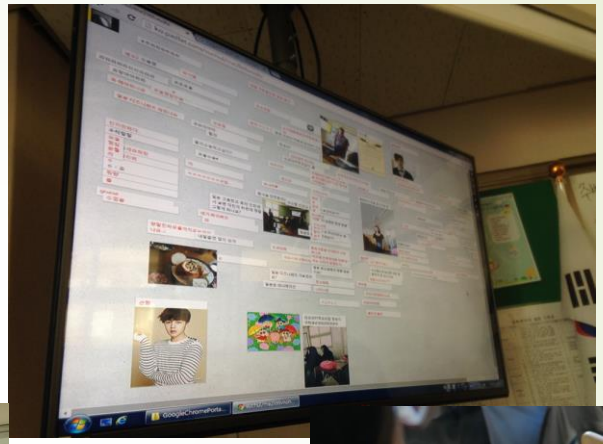
小学校１年生はスマートフォンの所有率90%

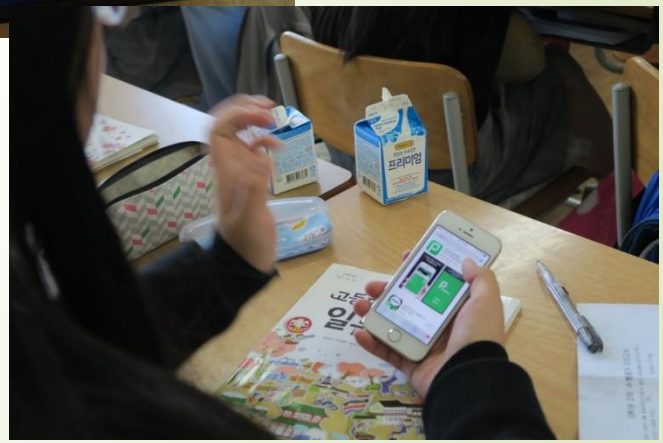
タリン（エストニア）の情報教育





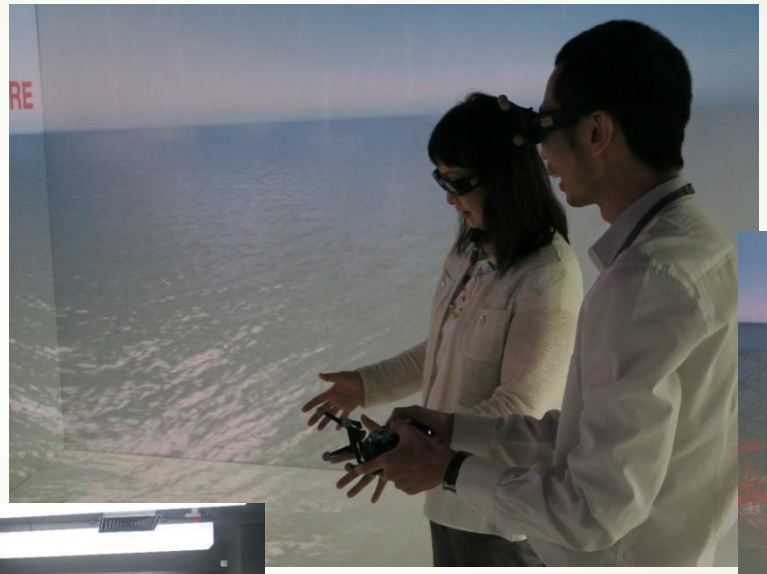
韓国の国語教育は常に情報機器と一緒

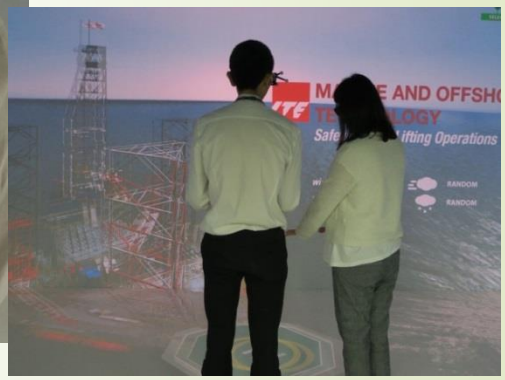




©Eriko Uematsu

テクノロジーの進化により急加速する教育のIT化 EduTech





教師のコメント：
今やVRやARを使わないでは
授業できないという教師

日本の情報教育の現状

- 情報活用の実践力

  →授業ではWord　Excelを使うこと

- 情報の科学的な理解

  →実際に行われていない例が多々ある

- 情報社会に参画する態度

  →実際はモラル教育でネットを使わないといった事例が多い。

©Eriko Uematsu

これからの国語科教育

- 創造力をもたせるためにあらゆるメディアが教材となる
- コミュニケーションが前提
- 学習者の得た知識をどう再構造化させるか。

どのテキストにも応用可能な読みの方法論を扱う

先ほどの四つの基本概念

制作側にたつ

言語や編集の理解

表象

オーディエンス (受容理論)

©Eriko Uematsu

日本語教育に携わる

日本語教師養成講座の非常勤講師

©Eriko Uematsu

日本語教育からみた国語科教育

- 国語科教育は橋本文法だけ
- 社会言語学などの知識不足
- プロジェクトワークなどの授業方法が少ない
- 漢字の練習や宿題が多すぎる（創造的なものより多い）
- ICTを使った教育がこれまで少ない
- 人と人とのコミュニケーションを育む例が少ない
- 徹底的な議論をしない
- 日本語語学史の通史が少ない
- 情報活用能力の観点が少ない

©Eriko Uematsu

ハヤカワ

言語学習の目標は、ハッキリ考えることを学び、より効果的な話し方・書き方を学び、聞いたり読んだりしたことをよりよく理解するもの
意味論の方法を持ってせまろうとした＝人間生活における言語の役割を生物学的に機能的に理解し、また言語の種々の用途を理解すること

©Eriko Uematsu

　日本に最初にメディア・リテラシーを紹介したのは、社会学者やテレビ関係者、一部の教育学者
国語科教育という観点から見ると、近年のメディア・リテラシー論で述べられていることは、原理的にはコージブスキーやハヤカワの「一般意味論（general semantics）」で問題とされ論じられていることと似通っている点もある

　テレビの視聴者はあるコミュニケーションに参加しているのであり、新しい言語体系の一部になっている。ロラン・バルト はコードの言語は情報様式と結びついた新しい現象ではなくて、すべての言語に内在する可能性だということを論じているが言語の批判的理論は避けている

　ハヤカワの本にボードリアールやロラン・バルトといった“言語として社会をとらえていく方法による批判的社会理論”の話は取り上げられていないが、意味論的観点に立った批判的思考の概念の重要性を感じさせるハヤカワの論は、メディアを読み解くといった我々の素養を広げる

ハヤカワの意味論

アルフレッド・コージブスキーの『一般的意味論（非アルストテレス的体系）「General Semantics [“non-Aristotelian system”]of Alfred Korzybsky」』や、フロイトからはじまった動的な考え方を持つ心理学者精神医学者から示唆を得たもの

コージブスキーの概念はアリストテレスからの論拠を少し踏み出した二値的なものに、とどまり、多様なポストモダンの領域にはおさまらない。コージブスキーはモダンの終焉をかなり、早くから示唆したものとしては、大きく価値付けられるが、そこから多値的なものとしての考えを生み出したハヤカワのポストモダン的なものこそ、ポストモダン後の情報社会においては価値がある問うことができる

メッセージ（ことば）の意味内容そのものを問題にする意味論的観点に立った“批判”を取り上げなければならない。

日本のメディア・リテラシー論はどちらかというと、メディアへの批判も社会学的な立場からのものが多い。
　ハヤカワはカナダで生まれた日本人である。彼は学校に入ってからはほとんど日本語での教育は受けなかった。彼は日本にも英語圏と同様の意味論の必要性がある。
コードとは情報様式、つまり電子メディアによりコミュニケーションに独特の言語、あるいは、記号システムと考えてよい。かつてソシュール が示したように記号の二項対立構造、意味を構成する記号論的際の体系を理解可能なものとするためには、メディア教材は言語構造の結果としての理解することの必要性も不可欠である。

マクルーハン

各メディアには，そのメディアの特性に属したメッセージ性を持っている。

スコラ的・コトバ主義的な教授法が全一的に学校を支配していた時代には，コトバを外界の現象の知覚とたえず結びつける（ザンコフ　1974：17）ことが大きな進歩的役割だった。

映像メディアの登場によって，教授の基本的手段としてその相互関係は，コトバとともに，映像メディア等の新たなパラダイムに転換しつつある。

アメリカの教育界では，1957年頃からティーチングマシーンとプログラム学習（西本　1979：13）が盛んになった。アメリカではコンピュータの学習は文字のリテラシー（＝読み書き能力）の学習の延長上にあるもの（佐伯，1999：15）だとみなしている。

©Eriko Uematsu

日本語の教育の場においても，文字の読み書きができることと同様に教師がメディアを使いこなし実践していく必要がある。また，視聴覚に訴えるメディア教材は心理学的な効用（羽鳥，1970：1-18）もある

情報（information）とはラテン語で「フォーム（かたち）を与える」という意味であるが，諸情報はさまざまなかたちで確認・整理され，概念などの多用なシンボルと結び付けられて脳内に蓄積（宮崎　1998:30-34）される。

時代の変化

各分野の専門知識の融合が求められている
またICTを使いこなすことの上に教科教育が行われる

国語科教育や日本語教育も例外ではない

©Eriko Uematsu

新学習指導要領（案）

総則　第３
情報活用能力
コンピュータの文字の入力、プログラミング体験
論理的思考力
情報活用

第２章　第１節　国語
コンピュータの文字の入力
学校図書館の計画的活用
情報手段を主体的に選択し活用

上記は現状の国語科教育で実践するには難しい

©Eriko Uematsu

情報教育の中のリテラシーとは

シャノンウィバーなどの情報理論などの知識や

コミュニケーション理論、メディア論の観点からの

情報リテラシーも必要

メディア＝媒体

媒介するもの　今はTwitterなどのSNS、インターネットのウエブサイトなどのつたわれ方が必要となってくる

教師の一斉教育のみでしか教育が受けられなかった時代とは異なる

©Eriko Uematsu

そもそも

言葉はなぜ必要？

鳥は泣き声でOK　　人間も最初は音だけ→それが言葉になった

理由　伝えるため

コミュニケーション→情報伝達

情報の理解が言語のコンテクストを理解する

植物の名前　その地方に対応（レヴィ＝ストロース）

グローバル化の時代にどう理解していくのか

コンテクストの理解が必要

©Eriko Uematsu

結論

- 国語科教育と日本語教育は融合されるべき時代
- 情報教育はそれをつなげる理論的なベースの枠組みを持っている
- 情報理論の枠組みの中でメディア（文学、写真、映像、その他）の理解が必要
- 21世紀には情報スキルがある上での教育が必須

©Eriko Uematsu